

医学班 福富江利子(京都大学) エチオピア高所住民の生活習慣に触れて

私にとってエチオピアは初めての海外フィールド調査であった。それまで途上国へはタイ、しかも都市部のみの旅行経験しかない私に「かなり辛いから覚悟しておいた方が良い」と何度も念を押された。言語に加え、様々な不安が私の頭から離れなかった。

いよいよ出国。閑空で天婦羅を堪能し、暫しの日本食に別れを告げ、ドバイ経由でエチオピアの首都アジスアベバに到着。道中1泊して最後の近代文明を存分に味わった後、今回の調査地である西南部に位置する南オモ地域のドルドラ村に到着した。蛇口をひねったら水がでる、ボタンを押すと電気がつく生活からはしばしの別れである。しかし、きれいな飲み水を現地の方が運んできてくれており、ジェネレーターで電気を起こしていただき夜は僅かな時間な明りが入り、パソコンの充電ができた。

健診初日。あふれんばかりの人達が受診のために来訪してきた。カウンターパートが事前に声をかけておいてくれた人以外にも追加で診察を希望している人が多数いた。私は健診中の血液検査係を任せられ、ひたすら血液を採取していた。今回の健診対象者は50歳以上。生まれて初めて採血（実際には注射針のみで指先を少しだけ刺し、わずかな血液量を絞り出した）を受ける人が大半らしく、恐怖の余り目を覆っている場面もあった。「近代文明」から遠く離れたところで生活を送る彼らはさぞかし健康的で、疾患を持っている人はわずかだろうと思っていた。

しかし、健診結果、WHOの基準を満たす高血圧症の人は全体の37%。ちなみに厚生労働省の調査によると日本では約半数。単純に比較はできないが、あの質素な食事で血圧が高い理由は塩分摂取量なのだろうか。空き時間を利用して数件の家庭訪問に出向く機会があり、台所を見せてもらったところ、各家庭に塩があり、とても好きな様子であった。

彼らの生活習慣を聞けば聞く程、新鮮だった。ある日、現地通訳の1人から「何でもしてあげるからここ

に居てほしい」と冗談交じりで告げられ、面白半分で「何をしてくれるのか」と尋ねると「羊もあげるし1日5個卵を産む鶏をあげる」と言われた。日本でいう「結納」に当てはまるのだろうか。気を良くした私は「それだけではここに留まることはできない」と話すと「じゃあ他に何が欲しい」と聞かれ、色々な意味で悩みに悩んだ挙句、「電気」と答えた。そうすると「何故電気が要るの?」と想定外の返答が返ってきた。彼らが理解・納得できるような返答を考えた末「夜が暗いから」と苦し紛れな言葉しか出ず「それなら蠟燭があるからいいじゃないか」と言われた。母国語以外に英語も話す国際的な彼らであるが、日常生活は近代文明にほとんど頼らない生活を送っている。そのギャップもまた私には驚きと共に新鮮であった。

今回の調査は驚きの連続に圧倒され、気がつけば帰国の途についていた。次回の調査ではオリジナルの視点でフィールドに入らせてくれるよう、自分自身の知識をもっと広げておきたい。



写真1 健診を待つ人々



写真2 デジタルカメラの撮影に喜ぶ現地の子どもたち。背後にある建物(小学校)が健診会場兼ベースキャンプ

文化班 小坂康之(総合地球環境学研究所)
ヤクの起源にまつわる伝説

夕暮れの体育館に、太鼓の音が響きわたる。太鼓に合わせて、子象ほどの大きさもあるヤクが、飛び跳ねながら動きまわる(写真1)。巨大ヤクの中には踊り手が2人入り、1人は頭、もう1人は尻尾を操っている。そしてお面をかぶった男が、暴れる巨大ヤクの首に縄をかけようとするが、なかなかうまくいかない。

2009年11月に、アルナーチャル・プラデーシュ州西部のナムシュ村で、ヤク・ダンスを見ることができた。写真1は、その時の様子である。ヤク・ダンスは、数百年前に初めてヤクが見つけれられたときの様子を踊りにしたものといわれる(Wangchuk, 2004: p.38)。ヤク・ダンスは本来、ブロッパと呼ばれる牧畜民のものだとされるが、現在では農耕民のモンパ族の村でも、2月のロサル祭りなどで演じられている。

初めてヤクが見つけれられたときの伝説は、1枚の絵でも表現されている(写真2)。ナムシュ村のリンチンさんが、その絵を見ながら内容を説明してくれた。絵の左側に、白、赤、黒色の3つの割れた卵が描かれている。卵を産んだ親鳥は、大きくはばたいて空を舞っている。白の卵から生まれた白いヤクは、絵の右側の空に向かって飛び立ってゆく。赤の卵から生まれた赤いヤクは、絵の右側の川に飛び込んでゆく。そして黒の卵から生まれた黒いヤクは、絵の中央に描かれているように、毛皮の服を着た屈強な男にロープで頭をしぼられている。この絵の舞台は、チベットのコンブー・ブラズムという場所だ。絵の中の男はトイパガルという名で、父親ヤクポジタルの次男である。長男ハラウダルゲと三男ガオサムドゥルは父親にかわいがられたため親元で暮らし、次男トイパガルだけが家を出た。そして次男トイパガルは1人で黒いヤクを捕まえた、というのがこの絵の内容である。伝説ではその後、ヤクのおかげでヤクポジタル一家は裕福になり、財産をめぐる家族の争いもなくなり、その富はコミュニティ全体をも潤した、と続く。

チベットを踏査した河口慧海は、ヤクの起源にまつわる次のような伝説を紹介している。「チベット伝の一説によれば、山犏牛(ドン)と犏牛(ヤク)と水牛とは三兄弟たりしが、故ありて別るるに及んで、水牛はインド平原を下り、犏牛は高原に出でて人に畜われ、山犏牛は山に入れりという」(河口, 1981: p.244)。「山犏牛とは非常に獐猛な野獣で、犏牛の原種だとされる」(同上)。そして山犏牛は、「大きさは通常のヤクの二

倍半あるいは三倍」で、「角の長さが五尺ばかり、太さは二尺五―六寸、背の高さは七尺」(河口, 1978: p.122)もある巨大な動物だという。もしかしたら、ヤク・ダンスで演じられる巨大なヤクや、ヤクにまつわる伝説の絵でトイパガルに捕まえられた黒いヤクは、実は山犏牛なのかもしれない。

ところで、もうすぐロサル祭りの季節がやってくる。ナムシュ村のゴンパから、ヤク・ダンスの力強い太鼓の音が聞こえてくる日も近い。

(参考文献)

- 河口慧海. 1978.『チベット旅行記(二)』講談社, p.122.
河口慧海. 1981.『第二回チベット旅行記』講談社, p.244.
Wangchuk, P. 2004. A guide Book of Tawang Darshan, Arunachal Pradesh. Himalayan Publisher, p. 38.



写真1 太鼓に合わせて巨大なヤクが飛び跳ねる。2009年11月4日、ナムシュ村にて。



写真2 ヤクの起源にまつわる絵。2009年11月10日、ディランのNational Research Center on Yakにて。

S. S. Sagwal (1991) LADAKH (Ecology and Environment). Ashish Publishing House, 136pp.

目次

- 第1章 はじめに
- 第2章 気候条件
- 第3章 土壌と土地利用
- 第4章 農業
- 第5章 畜産
- 第6章 森林と林業
- 第7章 環境汚染
- 第8章 野生生物
- 第9章 薬用植物
- 第10章 砂漠化対策
- 第11章 植林の挑戦
- 第12章 アグロフォレストリー

著者の所属は「S. K. University of Agricultural Science & Technology Srinagar」となっていますが、現在はジャンムー管区の Sher-e-Kashmir University of Agricultural Sciences and Technology of Jammu (SKUAST-J)とカシミール管区の Sher-e-Kashmir University of Agricultural Sciences and Technology of Kashmir (SKUAST-K)に分かれています。1960年に農学部、1984年に畜産学部、2005年に水産学部、2007年に林学部と園芸学部といったように規模が少しずつ拡大しています。

本書は各種統計が表形式で数多く紹介されています。発行年が古いこともあって、新しいデータがありませんが、以下ではめぼしいものを挙げてみます。1章にはラダック地方の面積、著名な山頂、都市・農村別人口、男女比などがあります。このうち、意外だったのは1901年から10年ごとにある男女比で、1971年までは900人台後半(男性1,000人に対する女性の数)だったとされている点です。1981年にはなぜか800人台に急落しています。よく知られているように、インドでは男性に比べて女性は極端に少なく、南インドのケーララ州では「Daughter Missing Problem」と呼ばれていました。ヒンドゥー教信者独特の現象だと思っただけで、仏教徒の多いラダック地方でなぜ他地域と同様の傾向を示しているのかは謎です。

4章には所有規模別農家の比率、作目別作付け面

積・収量、5章には畜種別頭数、ミルク生産量(日量)、畜種別ウール生産量などがあります。専門分野外なので日本の場合と比較するしかないのですが、農家の所有規模をみると約90%は3ha以下で、0.5ha以下は約40%を占めており、大部分が零細という特徴はまったく同じです。6章には下記のようなラダック地方の土地利用パターンが示されていました。残念ながらいつの時点の情報かわかりませんが、一度でも現地へ行ったことのある人ならそれほど違和感なく受け入れられると思います。区分にある耕作可能地は Cultivable Wasteland、純播種地は Net area sown で、両方を合計すると荒野・不耕作地に匹敵します。

区分	面積 (ha)	比率 (%)
森林	460.0	0.7
非農業利用地	3,000.0	4.7
荒野・不耕作地	29,000.0	45.0
放牧・牧草地	1,215.0	1.7
樹木作物・果樹	3,000.0	4.7
耕作可能地	9,000.0	14.0
休閑地	73.0	0.1
純播種地	18,752.0	29.1
合計	64,500.0	100.0

意外といえば、8章に記述のある野生生物の生息地として国立公園や保護区の存在です。国立公園名は「Hemis High Altitude National Park」といい、レーから30kmほど離れたところにあるようです。広さは約300km²で、8種の哺乳動物、40種の鳥類が記録されているとのこと。キャンプサイトがあると書かれていますので、トレッキングに来た人が利用している可能性があります。ただし、レーに滞在していても、それほど宣伝していたような印象はなく、ガイドブックのロンリープラネット(日本語版)に紹介がありません。他にも、狩猟保護区(4か所)と湿地保護区(4か所)があり、野ウサギやガンなどが生息しているみたいです。

以前、ケーララ州のトラ保護区でトレッキングツアーの参加したとき、イギリス人とポーランド人が何としても実物を見ようとこだわっている様子を目にしたことがあります。観光客を呼び込もうとするなら、野生動物好きな人向けの対応が求められそうです。うまく運用している事例は少ないようですが、ガイドなどの雇用創出にもなります。

統括班 ■ **野瀬光弘(総合地球環境学研究所)**
インドミニ情報(5)

インドにおける主要な木材産物の生産、輸出入量は FAO (Food and Agriculture Organization of the United Nations. 国連食糧農業機関) のホームページに掲載されています。以下では 2008 年時点のデータを示します。

表 木材産物別の生産、輸出入量

単位：m³

区分	生産	輸入	輸出
木炭(トン)	176 万 5,100	2,013	24,206
燃材(針葉樹)	925 万 5,900	—	—
燃材(広葉樹)	2 億 9,852 万 6,400	—	—
燃材	—	13,264	1,163
製材(針葉樹)	990 万	550	15,603
製材(広葉樹)	488 万 9,000	32,627	24,617
木質パネル	259 万 2,200	12 万 6,220	64,995
紙(トン)	418 万 3,100	173 万 4,463	37 万 3,226
その他パル プ(トン)	199 万 5,300	5,346	627

資料：FAOSTAT

大部分の途上国と同様に、生産量の 9 割くらいは燃材で占められ、製材や木質パネルは相対的に少なくなっています。特徴は生産量に比べて輸出入量が極端に少ないことです。インドは中国とともに莫大な人口を抱えており、世界全体で木材需給のひっ迫状況が今後起こる原因ではないかと以前は思っていました。ところが、統計データをみる限りではインドが基点になることはなさそうです。ただし製材、紙、その他パルプ生産量は 2005 年から 2008 年、木質パネル生産量は 2007 年と 2008 年でまったく変動がなく、信頼性には

疑問が残ります。人口増加や経済成長から類推すると、もっと生産量が増えていても不思議ではありません。紙輸入量は 2001 年からほぼ一貫して増加傾向ですし、今後は中国に続いて一大消費国に大化けする可能性があります。

なお、インドの紙生産の特徴は中国と同様に「その他パルプ」を原料にしている比率が高いことです。これは稲わらや麦稈といった草本系の原料を示しています。相対的に比重が小さいですし、一時期国内でもはやったケナフみたいに高コストになりそうですが、人件費が安いからか、大きなシェアを占めています。また、アッサム州ではタケを紙の原料とする工場が複数立地しており、もしかするとアルナーチャル・プラデーシュ州でもチップを生産、移出しているかもしれません。ラダックも含めて、村と州のレベルで林産物生産・流通の実態を調べてみる価値がありそうです。

■ **主な海外出張** ■

- ・水野一晴
インド・アルナーチャル (2月8日～3月2日)
- ・石本恭子
インド・アルナーチャル (2月9日～3月26日)
- ・月原敏博
インド・ラダック (2月16～24日)
- ・別所裕介
インド・ラダック (2月16日～3月2日)
- ・谷田貝亜紀代
インド・ラダック (2月17～25日)